A・J・ボードイン書簡について

石田純郎

日本医史学雑誌第三十四巻第二号
昭和六十三年四月三十日発行　昭和六十三年一月二十七日受付

はじめに

中野操先生の論文の一つに、「ロイトルとボードイン—同一人説を否定す」[一]がある。岡山藩医学館教師ロイトルに関する、岡山へ残された古記録の中に、彼の姓名をロイトル　ボードキンと記した書類（維新以来外国人雇入書類　岡山県立図書館蔵）があり、その書類を根拠に、戦前戦後の岡山では、ロイトルとボードインの同一人説が通説となっていた。この通説に対し、中野操先生は、当時国内で集め得たもっとも詳細でかつ正確な資料を元に、ロイトルとA・F・ボードイン（Antonius Franciscus Bauduin 1820—85）が別人であることを論証したのがこの論文であった。

そして中野操先生は、最後にこう付け加えた。

岡山の人たちがなぜあのようにボードインに強い執着をしめすのであろうか。答えは至極簡単である。ボードインはあまりにも有名であり、反対にロイトルはまったく無名の人である。人物の価値、声誉の点でコンプレックスを感じ、ロイトルをボードインに置きかえたいという切なる悲願のあらわれと見てはどうだろうか。

筆者は晩年の温厚な性格の先生しか知り得ないのであるが、先生は妄説を根拠不充分のまま唱える人々に我慢出来なかったのであろう。先生の論考の中には、いいかげんな事を言った人に対し、日本人離れした攻撃的表現を使っているものを時々見かける。

しかしこの表現が筆者をしてロイトル研究へと踏み入れさせたことを考えると、この挑発は成功したといえよう。しかし筆者は当時、この文章にひどく憤慨して、とにかく正確な事実関係を洗い出したいと思った。そして、オランダ国内の図書館・公文書館・博物館等の歴史資料を保存している施設への、オランダ医についての手紙での問合わせをかわきりに、オランダ国内での現地踏査へと進んでいったのである。その間に知り得た知見については、すでに発表した。(二)

そしてA・F・ボードインとロイトル（Franciscus Johannes Antonius de Ruijter 1841—86）は、叔父・甥の関係であること、ロイトルの母がボードインの姉であることも判明した。ロイトル　ボードヰンと表記されていたのは、当時オランダにおいてもそのような習慣はなかったのであるが、とくにロイトルとボードインとの血縁関係を、ロイトルの就職に際して強調するためになされたものであると、推定された。

A・J・ボードイン書簡

一九八三年に至り、ハーグの国立中央公文書館にA・F・ボードインの弟A・J・ボードイン（Albertus Johannes Bauduin 1829—90）の書簡の抄文が大量に保存されていることを知った。

この書簡は、最初はA・J・ボードインとA・F・ボードインの没後、他の日本の品物と共に、ライデンの国立民族学博物館へ寄託されたものである。しかし規定の保管期間を経て、公有になる直前に、ボードインの遠縁の子孫により取り戻された。日本の美術品はオークションにかけられ、散逸した。そして同時に手紙のオリジナルは紛失した。博物館は返却したと言い、子孫は知らぬと言う。しかし幸なことに、博物館に保管中、書簡の要旨は、係員により読まれ、タイプされ別に保存されていたのである。そしてその存在は、オランダ人の日本研究家にとっては、すにで周知の事実であった。

A・J・ボードイン書簡は全部で一六四通で、第一信が一八五五年三月二十二日付（太陽暦、以後特記せぬ限りはすべて太陽暦とする）で、最終信が一八七四年十一月三十日である。一八五五年三月二十二日から同二十六日までがオランダ

から、一八五五年七月八日から一八五九年一月二十二日まではバタビアから、一八五九年二月十四日から三月三十日までは香港や日本への船上から、一八五九年四月四日から一八六七年十二月二日までは出島から、一八六八年十月十七日から一八七〇年一月五日までは兵庫から、一八七〇年二月十二日から一八七四年十一月三十日までは横浜から（このうち一八七〇年八月三十日から一八七一年七月三十日までは旅行先のアメリカとヨーロッパから）投函された。すべての手紙は、彼の家族あてに出された私信である。

年度別では、一八五五年八通、五六年一一通、五七年一四通、五八年一五通、五九年一九通、六〇年七通、六一年四通、六二年九通、六三年一一通、六四年六通、六五年三通、六六年七通、六七年一二通、六八年三通、六九年二通、七〇年六通、七一年一一通、七二年七通、七三年五通、七四年四通であり、日本から出された手紙が一〇〇通余となる。

オリジナルの書簡は遺族の遺憾な行為により紛失し、現存するのはオリジナルからのオランダ語抄文である。

筆者は医史学的に重要であると考えられた個所をライデン大学H・ボイケルス準教授に英語に翻訳してもらい、その一方で来日以後の書簡については、年代の古い順に神戸のオランダ総領事J・A・コーイ氏の好意で英語に翻訳してもらっていたが、コーイ氏の帰国により、最初の三〇％の翻訳が終了した時点で、中断のやむなきに至った。

その後、ライデン在住のフォス美弥子氏が、たまたま同書簡に興味を持ち、日本語に翻訳していることを知った。フォス氏に連絡を取り、その翻訳を見せていただいた。医学以外の社会・風俗に関する事項でも興味深い点があり、筆者自身も公表する必要を感じたので、筆者の仲介で公刊されたのが「オランダ領事の幕末維新」[三]（以後フォス本と略す）である。

フォス本の評価

日本未紹介の幕末維新の社会・風俗・医学描写を紹介した史料として、この本は貴重なのであるが、しかしながらいくつかの欠点がある。

一　まずこの本は、原資料ボードイン書簡の出所、保管施設についての言及をまったくしていない。

二　大衆向けという本の性格による制約からであろうが、引用文献についての記載がまったくないのも問題である。

三　人名のカタカナ表記方法が従来のものとまったく異なっている点は、とくに大きな問題であろう。例えばボードインがボードウァンに、ロイトルがライテルに、ブッケマがベウケマに、ポンペがポムペに、ボイケルスがベウケルスにと、ことごとく従来の方法と異なっている。従前と表記方法をあえてまったく変えた点について、筆者はフォス氏と直接面談し討論を行ったが、氏は単に、現在のオランダ人は、こう発音していると言い張られるだけであった。しかし一三〇年を経ると、発音というものはオランダ語も日本語も変化するだろう。問題は、当時の日本人がそのオランダ人を、どのような名前で認識していたか、という事である。発音の構造の質的な大きな違いのため、オランダ人名はどのように工夫しても、日本語のカタカナでは表記しきれない。この本のように大胆に変えられると、同一人であるかどうかの認識が、一般人には不可能となる。「ライテルとは俺のことかとロイトル言い。」フォス氏には、もう少し人名表記方法の歴史的背景を理解して、書簡を翻訳していただきたかった。

四　翻訳が、何の断わりもなく抄訳となっており、かつ恣意的に行われている。来日以前の書簡がカットされているのは、本の性格上問題ではないが、収録されている部分でも、三〜四割はカットされている。また翻訳自体が、必ずしも正確ではない。二、三の例について、フォス氏訳と、拙訳の比較をする。

一八五九年四月四日付より

フォス氏訳「突然船体が大きく揺れ動きました。次いで船室のドアが一斉に飛び開き」

拙訳「突然船が右舷に向ってねじれ、その直後右舷の船室のドアが全部ほぼ同時に開いて」

フォス氏訳では「右舷」という単語がまったく無視されている。

一八六九年五月二十八日付より

フォス氏訳「彼（A・F・ボードイン）の便りによると、腕や足の切断で忙しいそうです。医者の高潔な使命を果たす日常を送っています。」

拙訳「ボードイン博士は、大阪の病院から、彼が四肢の切断手術を行うという約束をしたと知らせてきた。そんな仕事が、医者のような高貴な職業の人のすることなのだろうか。」

フォス氏訳は、抄訳になっている上に、「約束」が脱落、「忙しい」という余計な単語が入っている。また身分の低い外科医の仕事を、高貴なドクターが行うとする驚きも、フォス氏訳ではうまく翻訳されていない。

このように明らかな誤訳も目につく。しかし、オランダ語から日本語への翻訳という常人にはやり難い仕事を行ったという点を評価して、あえて筆者はこの書の公刊に助力したのである。

今後の書簡の引用につき、筆者の翻訳個所には何も注記せず、フォス氏の訳によった部分は（フ氏訳）と明記し、またオランダ人名表記方法は、一般的な方法に改めた。

A・J・ボードインについて

A・J・ボードインの履歴は他に詳しい論述があるので、簡単に述べるにとどめる。一八二九年六月二十四日ドルドレヒトに生まれ、貿易に従事するため一八五五年オランダを離れ、バタビアを経て一八五九年四月三日、出島に渡来、同年オランダ貿易会社社員になり、一八六三年にオランダ領事、一八六五年にポルトガル領事、スイス領事（就任年不明）、一八六七年にデンマーク領事も兼任した。一八六八年神戸開港と同時に兵庫に赴任、一八六九年には横浜に赴任し、一八七四年末に帰国した。この間一八七〇年夏から約一年間休暇を取り、欧米を旅行し、また一八七二年にはオランダ獅子勲章を授与された。帰国後はハーグの日本公使館で働き、一八九〇年七月二十五日に没した。

ボードイン書簡で明らかになった事

（一） 書簡中の人物

ハーグ国立中央公文書館に保存されている書簡には、すでにインデックスが作製されていて、そこに出て来る人名と、その回数は、左記の通り。

A. F. Bauduin	四一回	Dr. Ito	一回
Dr Beukema	三回	Mansvelt	一一回
Beukema-Toe Water	七回	Dr Matamotto（ママ）	一回
Van den Broek	五回	de Meijer	一回
Donders	三回	Dr Ohata（ママ）	二回
Ermerins	一回	Pompe	一四回
Gratama	九回	Dr. F. de Ruijter	一〇回
Van der Heyde（ママ）	一回	Miss J. de Ruijter	一一回

（二） 一般の事件（この項のみ事件発生日）

一八五九年三月八日、出島で火事が発生。一八五九年八月十九日には稲佐の Spengler Co 社で火災があった。一八五九年十二月二十五日から翌日にかけ外人倉庫から出火し、長崎大火となった。五〇万ギルダー以上の損失。一八六〇年一月三日には横浜で大火。一八六六年十一月二十六日にも横浜居留地で大火。一八六七年二月九日には、長崎の居留地近くの日本人街で三〇軒全焼の大火。一八七二年四月三日江戸（ママ）で大火。

A・J・ボードインは長崎や横浜の居留地の火事は、日本人による略奪のための放火と決めつけている。

（三）コレラの流行（以後日付はすべて書簡の書かれた日）

一八六二年八月九日。麻疹・天然痘の流行後、コレラの大流行が長崎の日本人間に発生、一日五、六〇人が発病している。ヨーロッパ人内での発病はないが、ボードインの使用人の一人も夕方六時に発症し、十一時には死亡した。（フ氏訳の要旨）

一八六二年九月八日。コレラの流行は下火となったが、長崎奉行もコレラに罹り死亡した。（フ氏訳の要旨）

（四）シーボルト（Ph. Fr. von Siebold 1796—1866）

一八六〇年三月三十一日。二、三時間シーボルトの話し相手をした。（フ氏訳）

一八六〇年六月二十日。シーボルトの来日目的は、彼の言によれば、自著の完成のためとオランダ貿易会社の顧問としてである。（フ氏訳の要旨）

一八六二年五月二十四日。シーボルトは礼儀正しい人ではあるが、老獪な古狐だから用心が必要である。（フ氏訳）

（五）ポンペ

一八六〇年二月頃（日付脱落）。ポンペは写真に熱中している。

一八六〇年三月三十一日。ポンペが私の写真を撮ってくれた。

一八六〇年十二月十四日。ボードインの検眼鏡は、私の貯金で支払う。

一八六一年一月二十八日。ポンペは日本人のために長崎に病院を建てている。ポンペがボードインの検眼鏡を引き取っ

てくれるが、現物は未着だ。

ボードインの検眼鏡とは、すなわちヘルムホルツのものを改良した、ドンデルスの検眼鏡のことである。従来ボードインにより一八六二年末にもたらされたと言われていた。現物到着の記載はないが、多分その一年前、ポンペの手許へ届いたと推定される新知見である。

一八六一年八月九日。ポンペはかなりの金額を蓄えた。

一八六二年九月八日。明後日、ポンペは江戸と神奈川へ発つ。（フ氏訳）（事実は不明）

一八六二年十月十二日。長崎のロシア海軍は、オランダ人医師（ポンペのこと）を利用し、報酬は支払わないで、安い勲章を贈る。

一八六二年十月三十一日。明日ポンペは上海経由で帰国する。（新知見）

一八六三年四月十日。カリプソ号の遭難で、ポンペが本国に送った八個の荷物のうち、三個を失った。

一八六七年三月二十日。ポンペの本が出版されたと聞く。彼は鹿児島以外に、出島から遠出したことはない。（一八六二年九月八日の内容と矛盾）

（六）　A・F・ボードイン

一八五九年八月十九日。高貴な医師（ボードイン）に、賤しい商人の弟がいるとの日本人学者（松本良順）の驚き。当時の武士の対商人観を示し興味深い。

一八六〇年十月十日。ボードインはオランダからロンドンやパリによく出かけるが、日本へも一度足をのばしたら？（フ氏訳要旨）

一八六二年九月八日。ボードインは日本へ三年間滞在することにより、財産が出来る。だから日本政府の申し出を引き

受けるべきだ。（フ氏訳要旨）

ボードインの来日理由が、個人的には第一に高給という点にあったことが解り、興味深い。

一八六二年十月二十八日。ボードインは午後三時、上海からコロンビア丸で長崎に到着した。（新知見）

一八六二年十一月十五日。ボードインは、長崎湾の展望のきく、四間ある新居に落ち着いた。一階が診察室と薬局、二階は寝室と客間である。彼は午前中は病院で働き、午後は自分の私的診察をして良い収入を得る。明日新任の奉行が病院見学に来訪予定である。

一八六三年六月二十八日。日英間の紛争のため、二～三週間ヨーロッパ人を病院から退去させた。

一八六四年五月三十一日。A・J・ボードインの隣家に、ボードインは転居して来た。

一八六四年七月十一日。彼は白衣ばかり着て、軍服はほとんど着ない。

一八六五年六月二十六日。今度許可される二年間の休暇で、彼は一年目は日本で過ごし、二年目はオランダで過ごす予定である。

一八六六年九月二十三日。ボードインは、ハラタマと共に江戸にいる。

弟子の日本人医学生のオランダ留学、江戸のオランダ系軍医学校創設、開成所内の理化学校創設等の幕府との交渉のための上京であろう。

一八六六年十月十八日。ボードインはまだ長崎へ帰ってこない。

一八六六年十一月五日。ボードインは、現在利子生活者の気軽な身分で、すべての仕事をマンスフェルトとハラタマに引き継いだ。二週間後にバタビアに向う予定。

一八六六年十二月十二日。すでに彼はバタビアのジャワに到着しているだろう。

慶応二年十二月（一八六七年一月）すぎから、翌年三月まで、ボードインがオランダへ一時帰国をしたという通説に対

し、古西[四]が疑念をはさんでいたが、この手紙は古西説を裏付けた。

一八六七年三月二十日。三月十八日にボードインはジャワから帰って来た。数週間の滞在の後、米国経由でウトレヒトに向う。日本人を何人か引率するが、その大半は医師で、その何人かは彼の教え子である。

一八六七年五月十四日。ボードインは数日以内に蒸汽船ロバー号で横浜に赴き、米国郵船で、米国経由でヨーロッパへ向い、八月までにオランダに着くだろう。

この上京の際、江戸の医学校の開設について七個条の約定書が、幕府と結ばれた（慶応三年五月十日＝一八六七年六月十二日）。この一時帰国の際、予定通り東廻りのコースを取ったのか、通説のように西廻りのコースを取ったのか、現状では不明である。

一八六七年七月一日。この手紙の着く頃（二ヶ月後と筆者は推定）には、ボードインは帰国しているだろう。

一八六七年七月十八日。ロンドンの Kakenken 在住のボードインあてに小包と手紙を送った。

一八六七年九月七日。四人の日本人をオランダに落ちつかせるために、パリ滞在を二～三日で切り上げて、オランダへ帰るつもりだというボードインの手紙が来た。

一八六八年十月十七日。政府（筆者は明治新政権と推定）はいつボードインが日本に帰るか私に聞いた。私はいつも彼は日本に五十日以内に帰るだろうと返事しているが、そうしてもう八ヶ月が過ぎ去った。今彼はロッテルダムに居る。

一八六八年十一月十五日。政府は、ボードインの帰日を待っている。

一八六八年十二月三十一日。政府は彼の到着を待ちこがれている。大阪病院の創設は、彼の到着にかかっている。彼は二～三ヶ月前までロッテルダムに居た。

ボードインが慶応四年一月（一八六八年二月）に再来日したが、内乱のため一時上海に避難していたという通説は、否定された。彼はロッテルダムにおり、そして政府は一八六八年二月（慶応四年一月）頃より、彼を捜していた。

一八六九年五月二十八日。ボードインは大阪で、四肢切断術の契約を交した。
一八七〇年六月十二日。エルメレンスが兵庫に到着したので、十月か十一月には帰国できるだろう。
一八七二年五月四日。ボードインは結局ハーグに落ち着いた。
一八七二年六月三日。六月一日付で現役復帰、医務局に就職すると聞いた。

（七）　マンスフェルト

一八六三年二月七日。コープマン提督号付軍医マンスフェルトは病気になり、私の家で寝ている。ボードインにも診てもらった。（新知見）
一八六三年四月十日。ゆっくり快方に向っているが、まだ私の家に寝ている。
一八六五年六月十日。マンスフェルトはまだ上海に到着していない。
一八六五年十月十日。上海で元気でいるが、ここは医者が多く儲からないという。
一八六六年九月二十三日。長崎養生所で元気に働いている。
一八六六年十一月五日。ボードインはすべての仕事をマンスフェルトとハラタマに引き継いだ。
一八七四年三月三十日。日本南部の反乱は治まった。熊本在住のマンスフェルトは、負傷者の手当てを行った。
一八七四年七月十八日。マンスフェルトは横浜に来ているが、弟のいるジャワ、スエズを経て帰国予定である。

（八）　ハラタマ

一八六六年四月二十八日。ハラタマが到着し、もう働き始めている。
一八六六年九月二十三日。ボードインと共に江戸へ行った。

一八六六年十月十八日。長崎で元気にしている。
一八六七年二月十三日。二週間後に江戸の物理化学学校に赴任する。
一八六七年三月二十日。ハラタマが横浜に到着したという手紙を昨日受け取った。しかし江戸の老中は、化学のことどころではなかろう。
一八六七年九月七日。ハラタマから時々手紙は来るが、彼はひどく孤独のようだ。
一八六八年十月十七日。大阪でハラタマに会った。彼は立派な大寺院に住んでおり、今後大阪に化学学校（舎密局）を開校する。
一八六八年十二月三十一日。ハラタマは、大阪でヨーロッパ人の誰からも、数時間も離れた場所に住んでいるが、ここでの治安は良い。

（九）エルメレンス
一八七〇年六月十二日。アムステルダムからすでに兵庫に到着した。大阪の病院に就職する。

（十）ヘーデン（van der Heyde）（ママ）
一八七四年十一月三十日。ファン　デル　ヘーデ（ママ）が来日している。彼は姉のヨセフィーンの臨終（一八七四年九月十八日没）に、オランダで立会った。（フ氏訳の要旨）
ボードインと学閥の異なるヘーデンも、来日前からボードイン家と親しい関係にあったことを示唆する。

（十一）ロイトル（F. de Ruijter）

ロイトルが重度の酒乱であったことは各所に出て来るが、既に発表[五]した。

（十二）ミスロイトル（Miss J. de Ruijter）とブッケマ・ツワーテル（Beukema-Toe Water）

ミスロイトルはボードイン兄弟の姪で、ロイトル医師の妹。ブッケマ・ツワーテルはミスロイトルの親友。この二人の女性は、開拓使仮学校女学校の教師を勤めたが、この事は別稿[六]に詳しい。

（十三）日本人たち

一八六八年十月十七日。緒方[七]（惟準）は今大阪に居るが、会えなかった。松本（銈太郎）は江戸に居る。この青年たちが急いで帰国せねばならなかったとは残念だ。

一八六八年十一月十五日。緒方（惟準）に大阪の川で会った。彼はミカドの侍医の一人で、京都から江戸に向う天皇の一行に付き添う途中である。

一八七四年七月十八日。帰国した伊東（玄伯）からは音沙汰がない。帰国したとたん、彼等の記憶力は衰えるのが普通である。

A・J・ボードイン書簡の意義

この書簡は、ボードインをめぐる幕末維新の来日オランダ医に関する一次資料として、貴重である。しかしA・J・ボードインが、一八七〇年夏から一年間日本を離れたため、重要なこの時期の書簡に、日本の医事関係の情報が少ないのが残念である。

前項に記したように、多くの点において新しい知見が得られた。その中で重要なものは、

一　ドンデルスの検眼鏡の日本への紹介は、ポンペの時代、一八六一年と推定された。
二　ポンペの離日は一八六二年十一月一日と確定した。
三　ボードインの出島到着は、一八六二年十月二十八日と確定した。
四　一八六六年十二月はじめ頃から翌年三月十八日までのボードインの出国先は、ジャワのバタビアであった。
五　日本政府は一八六八年二月頃より、ボードインの再来日を懇望していた。上海で待機していたという通説と異なり、ボードインはロッテルダムにいたことが確認された。
六　マンスフェルトは、一八六三年二月から四月過ぎまで病気のため、長崎のA・J・ボードインの家で療養していた。
七　ヘーデンは来日以前より、ボードイン家の知己であった。

これらの点が、最も重要な新事実である。

そしてフォス美弥子氏によるこの書簡の翻訳の労とその仕事の重要性を評価する一方で、翻訳の質に問題があることを指摘した。従って引用の際にはフォス本からだけではなく、原文のオランダ語文にまで遡上って検討し引用することを勧める。

最初に触れたように、中野操先生の論文が、筆者のボードインに関する一連の研究の動機の一つになったことを指摘し、擱筆したい。

筆者が書簡を翻訳するに当り、蘭文を英文に翻訳していただいた、H・ボイケルス博士、J・A・コーイ氏に深謝すると共に、著書よりの引用の許可をいただいたフォス美弥子氏にも深謝する。
本稿の要旨は、第八十七回日本医史学会大会(一九八六)、同関西支部大会(一九八五・四・二十一及び一九八七・五・二十四)で発表した。

文献および注

（一）中野操「ロイトルとボードイン―同一説を否定する」『日本医事新報』二一〇八号、八三～八七、一九六四
（二）例えば石田純郎『江戸のオランダ医』三省堂、一九八八
（三）フォス美弥子訳『オランダ領事の幕末維新』新人物往来社、一九八七
（四）古西義磨「幕末における第二回オランダ留学生」『日本史論叢』八四五～八六三、一九七六
（五）石田純郎「酒乱のロイトルの失敗」『日本医事新報』三二〇九号、六一～六二、一九八五
（六）石田純郎「ロイトルとツワーテル―開拓使仮学校女学校のオランダ人女教師たち」『日蘭学会会誌』第一一巻一号、一七～三四、一九八六

（七）緒方は、書簡中には Ohata とつづられている。オランダ語のGの発言は、グのロの形をして、声を出さずに喉を鳴らすので、一見「ハ」に聞こえる（例　Gratama＝ハラタマ）。従って、オランダ語風の Ogata の発音を耳で聞いて Ohata とつづったのであろう。

（三菱水島病院）

The A. J. Bauduin Letters

Sumio ISHIDA

The A.J. Bauduin letters are kept at the Central Archieves in The Hague, the Netherlands. These letters are the private letters of A.J. Bauduin (1829-90), younger brother of Dr A.F. Bauduin, (1820-85), and they comprise 164 letters from the priod 1855 to 1874. About 100 of the letters, from 1859 to 1874, are letters from Japan.

These contain much information concerning medical history. The main points clarified by the letters

are as follows:

1. It is suggested that the introduction of the ophthalmoscope of Donders to Japan was in 1861. It was previously believed that it was introdced by Dr. Bauduin in 1862.

2. It is confirmed that the departure date of Dr. Pompe from Japan was Nov. 1st, 1862.

3. It is confirmed that the date of arrival of Dr. Bauduin in Dejima was Oct. 28th, 1862.

4. Dr. Bauduin went to Batavia in Java from Dec. 1866 to March 18th, 1867. It was previously believed that he went to the Netherlands during this period.

5. The Japanese Government wanted Dr. Bauduin to revisit Japan as of about Feb. 1868. It was believed that he stayed in Shanghai in 1868, but in fact he stayed in Rotterdam.

6. Dr. Mansvelt fell sick from Feb. to April, 1863 and he recuperated at A.J. Bauduin's private house in Dejima.

7. Dr. van der Heyden was a friend of Bauduin family before his visit to Japan.

The A.J. Bauduin letters contain much additional new information concerning medical history. The letters must be considered to be very important material to the research of medical history during the latter half of the 19th Century.